

正解到達型グループワークでの各自の解答の共有過程

—解答の（不）一致への指向を中心とした検討—

増田将伸(京都産業大学)

1. はじめに

本稿では、大学の英文読解の授業で学生が多肢選択問題の解答とその根拠をグループで検討している場면을対象とし、各問についての議論の最初に各自の解答が共有される過程を会話分析 (Sacks, 1992) の手法で分析する。グループでひとつの解答と根拠を決定することがこの場面での目的であり、各自の解答の共有はその前段階として必要な作業にすぎない。しかしこの解答共有過程では淡々と各自の解答が順に発表されているわけではない。解答の一致／不一致が明らかになるにつれ、それに指向して参加者たちの相互行為の展開は異なっており、解答の一致／不一致への指向はその後の彼らの検討にも影響している。本稿では、各問の検討の冒頭に行われ、検討の進め方に影響を与えている各自の解答の共有過程を記述する。

2. 先行研究

グループワーク (以下 GW) が開始される手続きと、その手続きがその後の参加者の交渉や意思決定に与える影響の記述を目指す点で、本稿は Kämäräinen et al. (2021) と問題意識を共有する。ただし、Kämäräinen et al. (2021) が Couper-Kuhlen (2014) 等の研究を踏まえて GW を開始する発話の構成に焦点を当てているのに対して、本稿は GW を開始する発話に対して他の複数の参加者が順に応答していく過程を分析の中心に置いている。複数の参加者が順に同種の言明 (本稿では各自の解答) を発する連鎖環境で第一の言明が優位性を持ち、後続する言明は第一言明に従属するものととらえられるという点では、Heritage & Raymond (2005) が評価連鎖について行った議論が本稿の分析に基本的に当てはまる。

本稿で取り上げるグループでの読解活動は、「学習者同士が助け合いながら対話を通して問題解決を行い、テキストを理解していく読みの活動」(館岡, 2005: 93) である。対話によって読解過程を可視化し、メタ認知を働かせて既知の知識や考えを更新することを通じて読解能力の向上を目指す点も館岡 (2005) の提唱するピア・リーディングと共通する。ただし、問題に対して設定された1つの正解に到達することが読解活動の目的になっている点ではピア・リーディングよりも読みの自由度が小さくなると考えられる。

3. データ

本稿で分析対象とするデータは、近畿地方の総合大学の共通教育必修英語の授業内で行われた GW である。この授業では TOEIC® Listening & Reading Test の Reading Section の形式の4択問題を扱っており、予め解いている問題について3～4人のグループで話し合って1つの解答を決め、解答の根拠も説明できるようにする GW を取り入れている。GWの後、解答とその根拠を希望者がクラスで発表し (発表したグループの全員が平常点に加点される)、その後教員が解説を行う。GWは1回の授業内で3回程度行われ、GWを進めるリーダーが1回ごとに交代する。GWの進行手順は特に指示されていないが、最初に各自が解いた際の解答をグループで共有してからグループとしての解答の決定や根拠の検討を行うグループが多い。初回授業で、GWの趣旨は『聞いてわかった (気がする)』だけでなく『人に説明できる』レベルへ英文の理解水準を高めることであり「いろんなクラスメイトとの協働学習」を通じて「多様な他者と協働できるコミュニケーション能力」を身に付けていくことだと説明されている。

クラスは学部混成で、グループは担当教員が英語運用能力や性格などの要素を考慮に入れて編成している。GW収録はこの大学の研究倫理委員会の承認および参加者の同意を得たうえで対象グループにビデオカメラ1～2台およびICレコーダー1台を設置して行い、書き起こして分析を行った。本稿では13例 (5グループ) の分析結果を示す。2例 (1グループ) は TOEIC® L & R Test 300～395点程度の2年生で、他は TOEIC® L & R Test 400～500点程度の1年生である。以下の断片は全て1年生で、参加者氏名は仮名である。

4. 分析

GWでの議論は、リーダーなどの参加者が初めに「3番。」(1)1行目)のように設問番号を言ったり「169 どうなりましたかも」のように問題の解答を他の参加者に尋ねたりして始まる。それに対して他の参加者が「A。」(1)3行目)「Bにした。」「Dになった。」のように自分の解答選択肢の記号を答える。この1人目の応答は、簡潔な形式で円滑に産出されているように見える。(1)2行目のように応答の前に長めの間が空くこともあるが、参加者がノート等から自分の解答を探していることもあり、必ずしも非優先的応答の特徴とは言えない。)しかし2人目以降の応答は、解答が先行話者の解答と一致しているかどうかに向向して産出のされ方が異なってくる。

4.1 全員の解答が一致している場合

分析を行った13例のうち、全員の解答が一致していたのは5例(4グループ)だった。(1)では、2人目の堀内が自分の解答を確かめているかのようにゆっくりと解答を伝えるが(5行目)、それ以上に誰かが自分の解答の不確かさや誤りへの指向をみせることはなく、司会者のようにふるまっている小村以外の3人が全て選択肢Aを選んだことが8行目まで共有される。小村は自分の解答を伝えないが、他の3人の解答が揃った後に「珍しく合うやん。」(10行目)と発話することで全員の解答が一致しているという認識を示す。ここで「グループで1つの解答を決める」というGWの課題の1つが達成されたことになる。その後、笑い(12, 13行目)を経て17行目(省略部分)以降で小村が自分の解答を導いた根拠を話し、それに応じて堀内も自分の解答の根拠を話し(1)の直後)、もう1つの課題である「解答の根拠の検討」が行われていく。このように、全員の解答が一致している場合はグループでの解答の決定と根拠の検討が円滑に進んでいく。

4.2 2人目までの解答が一致し、3人目が異なる場合

3例(2グループ)では2人目までの解答が一致し、3人目の解答が異なっていた。次ページの(2)の直前では雑談がなされていたので、1行目が実質的なGWの最初の発話である。ここで大里は設問番号を言わずに自分の解答を伝えていくが、これは指定された範囲の最初の問題の解答だと理解されて、以降の話し合いが進んでいる。この大里の解答を小村が受け取り(3行目)、自分も同じ選択肢Aを選んだことを伝える(5行目)。その後、堀内が自分の解答は2人と違うことを伝える(6行目)。小村の質問(9行目)に答えて堀内は自分の解答がBだと明かすが(11行目)、自分の解答を「間違え」たものだとして評価している。他の2例でも、前の2人と違う解答を3人目が伝える際には笑い混じりないし笑っているような声色で発話されており、前の2人と解答が一致していないことへの指向が見られる。また、4.2節や4.3節の例の一部では解答の不一致が明らかになった後に「なんでやる。」(8行目)や「hhh¥なんでこうなったんやろ。¥」のように不一致の原因を問うような発話がみられ、解答の不一致を解決すべき問題だと参加者がとらえていることが窺える。

(2)の11行目の時点では各自の解答の根拠が共有されておらず各解答の妥当性が判断できないので、各自の解答の根拠を共有し、その妥当性に基づいて正解がどの選択肢かを決定するのが次になされるべき活動となるだろう。(2)でも、設問文中の語の意味を確認した(16-46行目の省略部分)後で小村が自分の解答の根拠を伝え(47, 50, 52行目)、それを他の参加者が受け入れて正解がAに定まる((2)の後の部分)。ただし3例とも、他の参加者と解答が違っていた3人目は自分の解答の根拠を話していない。3人目だけが正解していた例でも、残り時間が少なかったこともあってか、3人目は自分の解答の根拠を話さずに他の参加者の解答に合わせていた。このように自分の解答の根拠を話さないことも、3人目が(2)の堀内のように自分の解答が間違いである可能性に向向していることの表れだと考えられる。この指向は、先行研究で指摘されているような第一言明の優位性を反映したものだと考えられる。

(1) [1C30R9-1b0611_v1:40-2:20]

01 小村: >オッケー<.3番.

02 (0.9)

03 → 大里: A.

04 (0.6)

05 → 堀内: <Aやな.>

06 (.)

07 小村: はい.

08 → 高見: A.

09 堀内: はい.=

10 小村: =珍しく合うやん.

11 (0.2)

12 大里: hh[h

13 小村: [huhuu .hh

14 (0.2)

15 堀内: °(<どこで>↑ま)°

16 (5.6)

(22秒略;小村が問3を消去法で解いたと話す)

29 小村: 一応>なんか<自分的には↑

30 2行目(.)このに:さん

31 かなと思った°()°

(2) [1C30R9-1b0611_a0:09-1:03 (v0:37)]

01 → 大里: .hh A になった.

02 (0.3)

03 小村: A.

04 (1.0)

05 → 小村: うん. A.

06 堀内: あ, 違うわ.hhh

07 (0.2)

08 堀内: なんでやる.=

09 小村: =何にした? =

10 高見: =.hh=

11 → 堀内: =B にしてもうた間違えて.

12 (0.2)

13 堀内: わからなかった h

14 (.)

15 高見: >俺もわからん<↑かった.

((33.8 秒略; 単語の意味がわからないと小村が言い、堀内が問題文中の語 notified の意味が「通知する」だと伝える))

47 小村: ts- 通知の, 方法で: =

48 大里: ん:.

49 (0.7)

50 小村: °↓で:..°

51 (1.3)

52 小村: °↓まあ, °↑e-mail って書いてうから:

(3) [1C31R13-1c0709_v0:55-1:04 (a45-)]

01 船岡: で3が:..

02 (0.5)

03 谷山: うん.

04 船岡: 何にしました

05 (1.9)

06 → 谷山: A にした.

07 (0.5)

08 船岡: A か.

09 (1.1)

10 → 品川: 俺 B にしてた(わ):.=

大里の発話 (13 行目) からは参加者の発話に笑い声も混じり、この不一致への指向がより明確になる。(4)のように3人以上の参加者の解答が異なる例では、「.hh 割れ↑た:」(4)16 行目) や「↓>はい<みんなばらばら:」のように不一致の程度が大きいことへの指向を表す発話がなされていた。

4.3 2人目の解答が1人目と異なる場合

5例(3グループ)では2人目の解答が1人目と異なっていた。これらの例では、解答の不一致への指向の表れ方が少なくとも2通りみられた。1つ目は、2人目が解答を伝える時点で自分の解答が間違いである可能性に指向しているものである。これは4.2節の3人目のふるまいと同様だが、2人目の場合は3人目のように2人対1人で数的劣位に陥るわけではなく、1人対1人と数の上では対等である。それにもかかわらず2人目が自分の解答が間違いである可能性に指向することは、4.2節の3人目の場合より強く第一言明の優位性への指向が反映されていると言えるだろう。(3)がその例である。谷山が自分の解答がAだと伝えた(6行目)後で品川が異なる解答Bを選んだことを伝える(10行目)。谷山の発話「Aにした。」は「Aにする」という選択行動を過去形で述べている。一方、品川は同じく過去形だが「B にしてた(わ):。」とテイル形を用いている。テイル形は主観的な動詞を客観的に表す働きを持つ(谷口, 1997)ため、品川の発話は解答の選択という主体的な行動を客観的に述べており、Bという解答への品川自身の主体的な関与を弱め、解答がBだと強く主張しない表現になっている。これは、自分の解答が間違いである可能性への指向の表れだと言えるだろう。

解答の不一致への指向の表れ方の2つ目は、2人目が解答を伝える時点では不一致への指向をみせないが、その後自分の解答に同意が得られないと不一致への指向をみせるものである。(4)は、問12の検討が円滑に進まなかった後のやりとりで、1行目で問12の検討を中断して問13の検討に移ることが宣言されている。問12の検討を中断する判断に対して小村と大里が笑った後(3-6行目)、堀内が「>ごめん<13 わからなかった h .hhh」と笑い混じりに発話する(7-8行目)。この発話は、堀内が解答を出すことが難しいというふうに理解することができる。それを受けてまず大里が自分の解答がBだと伝え、直後に小村が自分の解答がDだと伝える(9-10行目)。大里に続いて2人目となる小村の解答は先行話者の大里の解答と異なっているが、小村は4.1節同様の簡潔な形式で解答を伝えており、この時点では解答の不一致への指向はみられない。しかし小村の直後に3人目の高見が大里と同じ解答Bを選んでいるとわかる(11行目)、小村は笑っているような声色で自分の解答Dを繰り返す(12行目)。小村はこの発話の直後に微笑んでおり、この笑いの声色と表情は、4.2節の3

(4) [1C30R9-4b0611_a0:10-0:22 (v0:05)]

01 堀内: 飛ばして[じゅ : う][さん.
 02 大里: [>そやな.<(0.2)]
 03 小村: [hhh .hh
 04 ¥間違ってた一[緒やけどな¥.hh]=
 05 大里: [hh(.)¥ほんまに¥]
 06 小村: =h .h[h
 07 → 堀内: [>ごめん<13わからなかった h
 08 [.hhh]
 09 → 大里: [ビ]ー.
 10 → 小村: D.
 11 → 高見: B.
 12 小村: ¥D.¥=
 13 大里: =¥B.¥h=
 14 小村: =うわ:ha[ha うわ:
 15 堀内: [uhh .hh まじか:.
 16 小村: .hh 割[れ↑た:
 17 大里: [hehe[hehe
 18 堀内: [ah ガチか

5. まとめ

本稿ではグループで1つの解答を決めて解答の根拠を検討するGWで、各問の検討の初めに各自の解答が共有される過程を記述した。1人目の解答や、先行話者と一致している2人目以降の解答は円滑に産出されるが、先行話者と異なる解答が産出される際には、解答の不一致に指向して笑いを帯びた発話がなされたり、自分の解答が間違っている可能性に指向した形式の発話がなされたりしていた。このような解答の不一致や自らが間違っている可能性への指向は、他の参与者2人と解答が異なって3人目が数的劣位に陥る場合だけでなく、先行話者1人と2人目の解答が一致しないという数的優劣のない場合にもみられた。これは、第一言明が優位性を持つという連鎖構造の反映であり、連鎖構造が参与者の相互行為を形作ることの一例が示されたと言えるだろう。

ただし、この連鎖構造に基づく優位性が解答共有後の検討に与える影響については本稿では僅かな記述しかできなかった。先行話者2人と解答が異なる3人目の参与者が検討の際に自分の解答の根拠を話していないことは示されたが(4.2節)、より多くの例に基づいてこの傾向と連鎖

構造の関係を分析する必要がある。数的劣位、自分の解答に対する自信の程度、他の参与者の解答の根拠の確かさなど他の要因の影響についても考える必要がある。3人以上が解答を異にする場合に検討が誰によってどのように主導されるか、議論の場では他人と異なる主張を展開することが優先的だと指向されるという先行研究の指摘(Kotthoff, 1993; Fujimoto, 2010)が本稿のデータに当てはまるか等の点についても今後の分析課題としたい。

謝辞 本研究はJSPS 科研費 22K00833 の助成を受けたものです。データの一部を研究会合、会話分析研究会のデータセッションおよびコレクション検討会等で検討していただきました。いただいた有益なコメントに感謝します。

参考文献

- Couper-Kuhlen, E. (2014). What does grammar tell us about action? *Pragmatics*, 24(3), 623-647.
- Fujimoto, D. (2010). Agreements and disagreements: The small group discussion in a foreign language classroom. In Kasper, G., Nguyen, H. t., Yoshimi, D. R. & Yoshioka, J. K. (Eds.), *Pragmatics and language learning*, 12, 297-325. Honolulu: National Foreign Language Resource Center, University of Hawai'i.
- Heritage, J. & Raymond, G. (2005). The terms of agreement: Indexing epistemic authority and subordination in talk-in-interaction. *Social Psychology Quarterly*, 68(1), 15-38.
- Kämäräinen, A., Eronen, L., Björn, P. M., & Kärnä, E. (2021). Initiation and decision-making of joint activities within peer interaction in student-centred mathematics lessons. *Classroom Discourse*, 12(4), 299-318.
- Kotthoff, H. (1993). Disagreement and concession in disputes: On the context sensitivity of preference structures. *Language in Society*, 22(2), 193-216.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on conversation, I&II*. Malden, MA: Blackwell Publishing.
- 谷口秀治 (1997). テイル形の3つの性質(客観性、現象描写性、報告性)について—ル形との対比から— 広島大学留学生センター紀要, 7, 40-48.
- 館岡洋子 (2005). ひとりで読むことからピア・リーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習— 東海大学出版会